

# 令和7年度 狭野小学校 自己評価書及び学校関係者評価書

学校の経営ビジョン: 人権教育を基盤とした、一人一人のよさや可能性を引き出す教育活動を展開し、これからの時代を生き抜くために必要な力を身に付けた子どもを育成するとともに、家庭・地域との連携・協働による活動を通して、郷土を愛する心を育み、活気あふれる学校を目指す。【4つの力】○人を大切にする力 ○自分の考えをもつ力 ○自分を表現する力 ○チャレンジする力

評価基準 4～期待以上（90%以上） 3～ほぼ期待通り（70～90%） 2～やや期待を下回る（50～70%） 1～改善を要する（50%以下）

	評価項目	評価指標	具体的な数値目標	方策・手立てについての自己評価	評定		学校関係者評価コメント
					自己	関係者	
主体的な学びと確かな学力	1 主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	○ 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、主体的に学習に取り組む児童を育成する。	○ 学校評価アンケートにおいて、児童用「主体的に学習に取り組む」項目 80%以上、教師用「授業改善」項目教師用 80%以上を目指す。	○ 校内研究において、「ロイロノート」の活用による協働的な学びの実践や、個別最適な学びの充実を図る授業改善に取り組んだ。児童用アンケート「自分から進んで学習に取り組んでいる」86.2%、教師用アンケート「個別最適な学びと協働的な学びの充実に向けた授業改善に取り組んでいる」100%というアンケート結果であった。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校内研究において、児童用教師用アンケートの結果が共に数値目標を超えており、積極的に充実した学習に取り組んでいることが伺える。</li> <li>○ 少人数学校ならではの良さが表れている。「授業がわかる・できる」だと思う。</li> <li>○ デジタルの現代で活字を楽しみ、親しむ環境ではないが、読書から得られる喜びを知ってほしい。</li> <li>○ 児童用アンケート「自分から進んで学習に取り組んでいる」の平均が昨年目標より下がっていると感じた。それと、読書活動の推進でも数値が下がっているのが気になった。</li> </ul>
	2 「分かる・できる」を実感できる授業改善	○ ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりを通して、「分かる・できる」を実感できる学習指導に努める。	○ 学校評価アンケートの児童用アンケートにおいて、授業が「分かる・できる」と答える児童90%以上を目指す。	○ ユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくりや ICT 機器を活用した授業づくりや少人数指導体制のよさを生かした個に応じた指導や適切な支援を行ったことにより「授業が分かる・できる」と答えた児童が96.6%であった。	4		
	3 読書活動の推進	○ 個人の読書目標を設定させ、発達段階に応じた読書をさせることで貸出冊数平均100冊以上を目指す。	○ 学校評価アンケートの児童用アンケートにおいて、月平均10冊以上本を借りるように図書館の活用を推進する。	○ ビブリオバトルを年2回行い、読書への啓発を行うとともに、読書への興味・関心を高めるとともに、読解力や表現力の向上につながった。 ● 個人の読書目標を設定したり、学校図書館のイベントを開催したりして、読書活動を推進してきたが、12月1日現在、人平均貸出冊数が70冊にとどまっている。高学年の読書冊数が少なく、課題である。	3		
互いを認めよい行動を実行する力	1 称賛と承認によるポジティブな行動支援	○ スクールワイドPBSに取り組み、規範意識の高揚や自己肯定感を育てる。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、「学校が楽しい」、「きまりを守る」、「自己肯定感」の項目 90%以上を目指す。	○ 児童の主体となったいじめの未然防止の取組をスクールワイドPBSの取組として実践したことにより、アンケートで「学校が楽しい」89.7%、「友だちにも自分にも良いところがある」89.7%であった。	4	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 皆、自分を認めてほしい、楽しい毎日になりたいと願っていると思う。1日を過ごす学校でその気持ちがかなえられたら、居心地の良い場所になり人としての土台もできると思う。</li> <li>○ 児童主体のいじめ未然防止の取組の実践が見られ、「学校が楽しい」「友だち愛」にもつながり、不登校「0」が達成できたと思う。</li> </ul>
	2 いじめ、不登校の未然防止	○ 教育相談とスマイル委員会の充実を図り、いじめ不登校の未然防止を図る。	○ いじめの解消100%、新規不登校児童0ゼロを目指す。	○ スマイルアンケートの結果をもとに教育相談を実施し、その結果をSCが参加したスマイル委員会を充実させた。さらに、SC・SSW・関係機関と連携し、生徒指導上での諸課題の早期発見・早期解決につなげることができた。新規不登校0ゼロ、不登校傾向児童は0ゼロであった。 ● 児童が主体となったいじめの未然防止の取組について、児童の意識を継続していく手だてが必要であった。	4		
	3 主体的に考え行動できる児童の育成	○ 学校行事や体験活動、委員会活動や係活動等において児童が主体的に行動する場面を多く設定する。	○ 学校行事や体験活動、委員会活動に「進んで参加している」と答える児童90%以上を目指す。	○ 学校行事や体験活動、委員会活動等において、児童が主体的に活動する場面を多く設定し、「進んで参加する」児童の割合は86.2%であった。	3		
体力の向上と健康安全の推進	1 基礎体力の向上	○ 体力向上プランに基づいた実践及び個別の指導により、体力アップを目指す。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、「体力が付いてきている」児童の割合80%以上を目指す。	○ 体力向上プランに基づいた実践及び個別の指導により「体力が付いてきている」と感じる児童の割合は82.8%であり、昨年度より数値が向上した。 ● どの学年も男女とも50m走が、Tスコアが50以下で、走力に課題が見られる。	3	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 保健指導を行い、自分自身で健康について考える取組において数値が向上したことは素晴らしい結果である。</li> <li>○ 給食を残さず食べる児童の割合が昨年と比較して向上している。食することで、健全な心身養われ、いろいろな面に影響することを児童が認識してほしい。</li> <li>○ 今年度は特別に暑さを感じた生活状況の中で、「健康・安全に気を付けて生活している」数値割合が高く、また、体力づくりにもつながる「給食を残さず食べる」割合も高く、継続指導を望みます。</li> </ul>
	2 健康・安全の推進	○ 保健教育、安全教育の充実を図る。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、「健康・安全に気を付けて生活している」児童90%以上を目指す。	○ 毎日の健康観察カードや検診結果等から、児童一人一人の生活状況を把握した保健指導を行うとともに、メディアコントロールチャレンジ週間等を設け、自分自身で健康について考え、コントロールしていく力を養ったことで、「健康・安全に気を付けて生活している」児童の割合が93.1%であった。	4		
	3 食育の充実	○ 給食指導の充実と弁当の日の実施により、食育の充実を図る。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、「自分の給食を残さずに食べる」児童80%以上を目指す。	○ 自分で給食を残さずに食べられる量の調整を行うとともに、年2回の弁当の日（11月と3月の遠足）と、給食感謝週間を充実させ、「給食を残さず食べる」児童の割合は93.1%であった。	4		
家庭・地域との連携・協働	1 家庭学習の充実と支援	○ 宿題や読み声の見届けについての啓発を行う。	○ 学校評価アンケートで「家庭学習の見届けを行っている」家庭の割合80%以上を目指す。	○ 家庭学習の取組について、「狭野小家庭学習の進め方」を配付したり、見届けのお願いをしってきた。 ● 個に応じた家庭学習の充実を目指したが、具体的な取り組みが不十分であった。家庭学習の在り方については、検討が必要である。	3	3.2	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学校だけの学習にならず、学校・家庭・個の三者が一体となって取り組み姿勢が見られるように願っています。</li> <li>○ 自分が生まれ育った故郷を愛することは、一生の宝だと思う。</li> <li>○ 地域に対する学習で「ふるさと高</li> </ul>
	2 地域人材や文化財の活用	○ 地域人材や文化財の活用等を行い、ふるさとへの誇りや愛着を育む。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、ふるさと高原を「好き」と答える児童80%を目指す。	○ 地域人材（棒踊り、神楽、さのっこまつり等）、文化財（狭野神社等）の活用、生活科や総合的な学習の時間等におけるふるさと学習、あるいは地域行事（神楽・敬老会・秋祭り・御田植え祭・べぶがシホ等）への参加を促した、「ふるさと高原が好き」な児童の割合は93.1%であり、郷土への誇りや愛情を育むことができた。	4		

	3 ふるさと教育の充実	○ 高原町「ふるさと教育の手引き」「ふるさと学習テキスト」等を活用し、ふるさと教育の充実を図る。	○ 学校評価アンケートの児童調査結果において、高原のことをよく知っている」と答える児童80%以上を目指す。	○ 総合的な学習の時間に、高原町について学習するとともに、「高原や狭野のことをよく知っている」と肯定的に答えた児童の割合は、3・4年生100%、5・6年生83.4%であった。	3	原が好き」な児童割合は高く「高原・狭野のことをよく知っている」割合で高学年が若干低かったのが疑問を感じた。
--	-------------	--	---	---	---	---